

諸君!

諸君、この雑誌は、
 文藝春秋のオピニオン雑誌
 として、戦後初めて
 創刊された。



■ 仲島由紀夫 — 平岡梓
 ■ 沖繩は帰ってくるけれど — 古山高麗雄
 ■ 世界史を変えた二人 — 森本哲郎

諸君

文藝春秋のオピニオン雑誌 *The Time Magazine*

1972

創刊号 1972年10月号

ある神話の背景

沖繩・波敷教島の集団自決

連載第6回

曾野綾子



あつと、川平 五郎

阿波連の白砂——愛をもって
殺した——生きていたかった
十二歳——何もかも夢のよう
——私は死んでるかね——不
死の手榴弾——天の敵

集団自決の場所は一果して亡び去ったか。今となっては、それは自明の理であるように思われる。それは思い出したくはないが、死に乞われた、波敷教島の集会所の一つなのである。
しかし、道義陣地が決まるまで、飯の用意に備へ、今でもその所在が不明なままに、どこか沖繩な記憶を持つのが当時の第二中隊（高野孝光少尉）当時二十歳）であった。
四郎の妻の夜——それが集団自決の前夜

ある神話の骨子

隊であるが、高野少尉、本部の上の警備上、六個班をして、少尉のもとには約六十名の兵たちがいた。基地隊が三十名、第二中隊が三十名である。

「海軍の傍でなら、二十名ばかり見ました。『海軍少尉の村長たちがいる場所として、その辺は海軍だつたのでしようか』」

「高野少尉のそばにいた田原少尉が自決したのには二十人ぐらいたつた。それも四月一日に、敵が沖津本島に侵襲してから後のことである。」

高野氏は現在、自衛隊の一佐である。私が高野一佐を富山の地方連絡隊に訪ねた時、高野氏は、あらかじめ一枚の手書きの地図を用意されていた。その地図上でいかに彼の職権が繰り上げられたかを詳説されたのだが、同時にそれは、未だに確認できない地点があるということも、冷静に正確に説明するためのものではなかった。

「上陸地点は、大佐、敵の上陸で得るところが決っています。つまり南の方から上る来る可能性が、強い。その場合、軍が南向きに陣したら、その後北側に、佐賀を襲くのは、一応考慮しようと思ひます。」

「高野少尉は、手書きの地図を示した。『上陸地点は、大佐、敵の上陸で得るところが決っています。つまり南の方から上る来る可能性が、強い。その場合、軍が南向きに陣したら、その後北側に、佐賀を襲くのは、一応考慮しようと思ひます。』」

「住民の方たちがどちらの派かどちらへばけられたのか、本道に正確には、未だにわかりません。」

「二十八日の朝、高野少尉は、偵察に出た。木の上から、敵の隊が、カムフラージュしたボンプをまとい、山の麓を、のびのびと歩いていた。」

「高野少尉は、偵察に出た。木の上から、敵の隊が、カムフラージュしたボンプをまとい、山の麓を、のびのびと歩いていた。」

169

るような青さと、目の痛くなるほどの涙の白さが消らかに抱きかかっている顔であった。金城つる子さんは、その小さな小中学校の、給食の世話をしている。体格のいい温かい感じの婦人であった。

「高野一佐は言われた。そして、もしもこの時この派にいたのなら私はわかるが、どちらの派にいたのならばどうも説明がわからない、というまづなことを嘆かれた。」

「高野一佐は言われた。そして、もしもこの時この派にいたのなら私はわかるが、どちらの派にいたのならばどうも説明がわからない、というまづなことを嘆かれた。」

「高野一佐は言われた。そして、もしもこの時この派にいたのなら私はわかるが、どちらの派にいたのならばどうも説明がわからない、というまづなことを嘆かれた。」

「高野一佐は言われた。そして、もしもこの時この派にいたのなら私はわかるが、どちらの派にいたのならばどうも説明がわからない、というまづなことを嘆かれた。」

「高野一佐は言われた。そして、もしもこの時この派にいたのなら私はわかるが、どちらの派にいたのならばどうも説明がわからない、というまづなことを嘆かれた。」

紙を味わったのは、殺して生き残った人々であつた。

私は清らかな海流の海を渡りを受けとめながら、そのようにして生き残った人々の、この世界中に恐らく類例のない十字架を背負つた生涯のことを考へた。年月が、彼らの心から、事件の本当の意味と、実感をむしろ消し去つてくれないか、と私は願つすにいられた。誰かが憎むことなく、ここには殺人があつた。死の世界に際す以外に、家族を守る方法がない、と彼らは考へた。このような異常な思考のパターンは、いつから、どこからどのような形で定着したのか。

當時「しかしあんな場合はどうだつたんでしようか、自然に息を吹き返されたんでしようか。」

つる子「胸が緩んで、じゃないかと思ひますけど。」

當時「すると、翌日まで、何時間くらいわからずにはいらしたのですか。」

つる子「六時間でした。」

ある神話の背景

當時「すると三時間ぐらひだから、その間、意識ははっきりなくとも、呼吸の方はもとに戻つていらしたんでね。」

つる子「いいえ、夕方の六時ですから、十五時です。」

つる子さんは「本島へも出たことはないし、生きてからずとここでです」といふ。子供二人も、もう大きくなつてしまつた。

軍医が政治官は当時十二歳の少年であつた。その日のことは思い出したくないといふ。しかし、思ひ出す義務が、時々この人には負わされるのであつた。

「どこにかく、生きていた、と思ひました」と東恩納氏は言つた。

「両眼がじくなるのは見ていたのですが、手榴弾は配られたのですが、うちのところは爆発しなかつたのです。僕はとにかく無事な中で生きていた、ということしか考えなかつたんです。そして姉が有り、され行つたことも見たんです。そのまゝ死体の中にもぐり込んで出なかつたんです。その時、目を潰してしまつた。米軍が近づいて来たのは半時間後であつた。そして生きて人間は全部たすけて行つたんです。そして残つたのは死体か、死体に隠れていた僕らと、たんで

し、彼はどうしても生きてたかた。どうしても生きてねばならぬ。彼は元氣だつた。脚だけ出るとはばたき、年寄らなうも全部取りおこし、彼は姉の手を引いて上つて行つた。七、八人は生きた死体として埋められた。

彼らが埋められてあるところに集つて来た時、最初に感じたことは、どうしてこんなにあんな人が生き残つているのだらう、ということだつた。彼らは自分の眼を信じられなかつた。自分たちが命を賭けて行なつたこと、来たことは、い、たい河だつたのか、そこは日本軍の方の衛生兵の治療を受けたひとであつた。

私はある日、東京で赤十字の看護士に聞いた。大田正一元帥がいた言葉を思い出して、

「もし、本島に五時命令を出していたのなら、生き残つて再び集つた人をそのまゝ見送しはしないであらう。命令は命令ですから、い、ったん出した命令は実行しなければならぬ、い、又、さまでできる状態にあつたと思ふんです。」

軍医が政治官は当時十二歳の少年であつた。その日のことは思い出したくないといふ。しかし、思ひ出す義務が、時々この人には負わされるのであつた。

「両眼がじくなるのは見ていたのですが、手榴弾は配られたのですが、うちのところは爆発しなかつたのです。僕はとにかく無事な中で生きていた、ということしか考えなかつたんです。そして姉が有り、され行つたことも見たんです。そのまゝ死体の中にもぐり込んで出なかつたんです。その時、目を潰してしまつた。米軍が近づいて来たのは半時間後であつた。そして生きて人間は全部たすけて行つたんです。そして残つたのは死体か、死体に隠れていた僕らと、たんで

し、彼はどうしても生きてたかた。どうしても生きてねばならぬ。彼は元氣だつた。脚だけ出るとはばたき、年寄らなうも全部取りおこし、彼は姉の手を引いて上つて行つた。七、八人は生きた死体として埋められた。

彼らが埋められてあるところに集つて来た時、最初に感じたことは、どうしてこんなにあんな人が生き残つているのだらう、ということだつた。彼らは自分の眼を信じられなかつた。自分たちが命を賭けて行なつたこと、来たことは、い、たい河だつたのか、そこは日本軍の方の衛生兵の治療を受けたひとであつた。

私はある日、東京で赤十字の看護士に聞いた。大田正一元帥がいた言葉を思い出して、

「もし、本島に五時命令を出していたのなら、生き残つて再び集つた人をそのまゝ見送しはしないであらう。命令は命令ですから、い、ったん出した命令は実行しなければならぬ、い、又、さまでできる状態にあつたと思ふんです。」

軍医が政治官は当時十二歳の少年であつた。その日のことは思い出したくないといふ。しかし、思ひ出す義務が、時々この人には負わされるのであつた。

「両眼がじくなるのは見ていたのですが、手榴弾は配られたのですが、うちのところは爆発しなかつたのです。僕はとにかく無事な中で生きていた、ということしか考えなかつたんです。そして姉が有り、され行つたことも見たんです。そのまゝ死体の中にもぐり込んで出なかつたんです。その時、目を潰してしまつた。米軍が近づいて来たのは半時間後であつた。そして生きて人間は全部たすけて行つたんです。そして残つたのは死体か、死体に隠れていた僕らと、たんで

し、彼はどうしても生きてたかた。どうしても生きてねばならぬ。彼は元氣だつた。脚だけ出るとはばたき、年寄らなうも全部取りおこし、彼は姉の手を引いて上つて行つた。七、八人は生きた死体として埋められた。

彼らが埋められてあるところに集つて来た時、最初に感じたことは、どうしてこんなにあんな人が生き残つているのだらう、ということだつた。彼らは自分の眼を信じられなかつた。自分たちが命を賭けて行なつたこと、来たことは、い、たい河だつたのか、そこは日本軍の方の衛生兵の治療を受けたひとであつた。

私はある日、東京で赤十字の看護士に聞いた。大田正一元帥がいた言葉を思い出して、

「もし、本島に五時命令を出していたのなら、生き残つて再び集つた人をそのまゝ見送しはしないであらう。命令は命令ですから、い、ったん出した命令は実行しなければならぬ、い、又、さまでできる状態にあつたと思ふんです。」

軍医が政治官は当時十二歳の少年であつた。その日のことは思い出したくないといふ。しかし、思ひ出す義務が、時々この人には負わされるのであつた。

「両眼がじくなるのは見ていたのですが、手榴弾は配られたのですが、うちのところは爆発しなかつたのです。僕はとにかく無事な中で生きていた、ということしか考えなかつたんです。そして姉が有り、され行つたことも見たんです。そのまゝ死体の中にもぐり込んで出なかつたんです。その時、目を潰してしまつた。米軍が近づいて来たのは半時間後であつた。そして生きて人間は全部たすけて行つたんです。そして残つたのは死体か、死体に隠れていた僕らと、たんで

し、彼はどうしても生きてたかた。どうしても生きてねばならぬ。彼は元氣だつた。脚だけ出るとはばたき、年寄らなうも全部取りおこし、彼は姉の手を引いて上つて行つた。七、八人は生きた死体として埋められた。

私は誰が誰の死を見届けるのか、と尋ねた。新しい者も、強い者が殺してやり（これは肉類を食つたパターンを持つといふ点で、不買味である）そして最後に残つた赤十字の軍隊を持つ實力も強い男が、自決しよう仕事を目を果さなければならぬ。心を許さう者ならば、殺されるほうが、殺すより楽だからである。決められている訳ではないが、自然に人間の心が、そのようなルールに従うのだ。

「軍隊の中に、たとへば防衛隊にたられなかつた強い人が、かわいものからやつて行つて、最後に残るわけです。やっぱりうちなんかの場合でも、僕ほどに、かく最後から二番目じゃないかと思ふんですけど、殺したつもりだけ、意識的におやじも自然に、力が放つてゐるんでしようね。」

当然であらう。殺さねばならぬという気持と殺したくないという気持が、一本の父親の手の中にこめられていたのである。

「うちの兄弟は姉が一人、姉の子供たちが三人と聞きます。」

「さういふ場合、お姉さまがお子さんです。」

「船をたすける」ことは難しかった、といふことであらうか。

一九七〇年十月十日は満月の夜であつた。渡海船の船尾にはほむらのように明るかつた。白い砂と、コンクリートの空境に、人の影が切り船のようにくつきりと落ちていた。

この渡海船の明らについて、詳しく記述しているのが、渡海船の元少尉であつた。

出陣か否かをめぐって、人々が「渡海船の最も長い日」を味わつていた夜、渡海船を光の海にしていた月を、軍医少尉はしつて忘れなかつた。

その夜、月影は波に弄ばれてきらきら光つていた。舟を下して海上へ出た時、軍医少尉は星のようだと感じた。

出陣はやめて、かりに軽便といつたにたつても、これでは恐らく、すぐに発見されてしまつてあらう。

軍医氏はそれ以上を語らないが、恐らく、その月、人間の運命を感じさせるものであつたろう。①つまり彼らの特攻隊は出陣できない運命にあつたのだ。その月、月影は

「あ、それで走ったんですか、みんな

「はい、下に、敵に突っます」

「生きてる人はですよ、生きてる人は」

「やっぱり、行くのは、また本部になっ

るわけです、兵隊の」

「庶務を求めて行くのは、再び日本軍のこ

ろだった、というわけである」

「あの時、突っ込んだんでないよ、皆、な

ににしない、という声を聞いたから、

子供はおんぶして、なんで死なないの、

と書いていた、走って行って、私が走っ

て行くところまで食べましたからね、こ

っちにきて、山とて「音楽」してました

「敵に突っ込んでないよ、って言ったから

私たちも出るって言ったから行ってさあ

けです、新入り込みに行つたらあつた

ですね、あんた、待つときなら、今、

子供もときどき、私が行つてさあ、

で言ったから、私が行つたわけです、

本部に、赤羽隊長に会いに」

「本部の、突っ込んで行ったから何

であんた、早まったことしたなあ」

「敵が命をかけたなあ」

「何でこんな事になったとするね、皆

「運命じゃない」と言つた。だからうちの

兄は、すぐまたに又、皆、今、あま

り早まったことどうよ」と言つて、そ

れからまた、私たちが反対方向に行つて、

また向うから引寄せられた。これは無二の

玉碎場だったけれど、私たちが反対方向

に行つたわけですよ。人と離れて、兄が

連れて」

「本部ではちょうど、くりから神、馬の上

に人、人の、馬(笑)あの小谷に入っ

たんですからね」

「二人の年寄の手つかんで、人々の運の上

から歩いて、くりから神、やつたよ」

「あのとときが殺した人もいる」

「あんなに、ひとがどんと死なしたよ」

「です」

「あ、これも疑問だね、普通い

だから、そこに突っ込んだのはアメリカ

であるのか、アメリカの海軍で突っ込

んだのか、日本軍がある、敵で突っ

が……」

「私もそれと思うなあ、友軍が突っ込ん

だ……」

「陣地内になれ込んで来た自決未遂たち

に発砲した事件についてかと思つた。友軍はそ

うでなかった。本部陣地になれたら前に自

決の場所、海軍をうち込まれたのである。

「そのために手榴弾で自決できなかった人

でも死んだ、それは、住民たちが怒りに駆

られて叫んで、それを殺して鎮めるために、

友軍が発砲したのではないかと疑われている

のである」

「會野、その海軍はどらが発砲したか、すね」

「五井、どらが発砲したか、は、きりしない」

「すね」

「會野、海軍は日本、持ってたか」

「A、わかりませんよ、持ってるかどうか、

私たちは」

「五井、こちらは海軍で持ってたかどうか

もわからないけれど」

「私は後になって、この点を調べた。日本軍

が当時もっていた大砲の主なもの、重砲四

二、重砲千二百発、榴弾砲六、榴弾砲

七、小銃百九十七、という日本軍は海軍は

一つも持っていなかった。

しかし重大なのは、事実、撃たれよと軍

たれなかつた、もしかしたら、日本軍に撃

たれるかも知れないという可能性を人々が信

じたに……」

「會野、」の口でお話だ、手榴弾でみんな、

たみただけで、手榴弾以外に……」

「A、さうどう不発でした」

「B、またあれですよ、死なない人は、私たちが

殺して下さい」と言つたから、行ってサア

で打たれている人もいます、あんとときは真

が狂っているから、みんなあれだったんか

ね、何が何だかもうわからん、早く死んだ

ほうがいい、という気が強いですね」

「C、お願ひして殺される人も多かった」

「D、生き残つたら大抵……」

「C、だから家族みんな一緒に死のうねとい

う……、手榴弾はついでです」

「意外つづいた人だけ残つて、家族はみんな

死んだという方がいます」

「會野、そんなうにして、生き残つた方がいい

のときですね、子供や家族を殺して、あとや

っぱりみんなおかしですか、この何年か

経つて」

「B、XXのおいさん、何してたか、あれも

てくな」

「D、OOのお母さんと、△△の奥さんよ、で

も殺したお母さんはなくなつてさあ、会野」

「會野、その時……」

「A、さうよ、あのおばさん生きてたんじや

ない」

「C、生きてた」

「D、あのかた、男より意地あるからね、自分

も自分で死んだ」

「會野、お話を伺つてると、手榴弾の不発は多

かったですね」

「A、不発のほうが多かったですね」

「會野、ケガの功名ですねえ、悪い手榴弾作

つて」

「C、私なんか若いからって言われてさあ、

やっぱり陣中に見つかつて、敵の手榴弾に

われて死ぬのは、その瞬間に自分で自分

のことをする、というんで、二、三は陣中から

もらつて死んでさあ、それ、ボケッとし

ょ、さう持っていたんです、ただいま

ちがいが死ななかつた」

「B、いい手榴弾であつたら、悪徳の人は残つ

ていない」

「D、死ねば、何も可哀まとは思わないく

らうよ、あのこと」

「A、死んでる人は一つも見ないぞ、た

OOの子供たちが、真つ黒になつてさあ、

た、こ、はあ、びんじやなくて、黒い、

なつて、このを見てさ、形ものみた

に」

「愛する者を殺して生き残つた人々の多くは

島に残っていない、悪い出の軍である

土地には居にくいであろうか」

「私はその思いを、文字通り月光を射て金

波瀬波に輝く海を見ながら書きしめた、二十

五年前も戦争なら、今、私が、いつかやっ

て来る自分の死の準備のために、人間のさま

まな生業をききつづけるのも一場の事なのだ

な、さう思はした」

「海軍にはトランジスタ、ラジオを下げた青

年がやって来る。音楽が、海の呼吸の音とな

れ合い、あたりの空気をかき通す、

と気がつく、山の奥にかかると位置にあ

る星が、一瞬大きく、まるで無人の山に人工

のあたりを、一つ切れたように光つてた、北

斗七星、死に切れないでいる人々の、大き

きく星が天にあげられたように、大きく

強く空を照らされてた、(以下略)

